

愛宕山城 あたごやま

静岡市葵区資谷

静岡平野に横たわる、東西2kmの谷津山の東端に位置し、北麓に北街道、南麓に東海道が通り、駿府東城を抑える要衝地であった。

資谷には今川義忠の重臣・朝比奈妙光が地頭職等を安堵されたが、愛宕山城との関係は不明。

西麓の龍雲寺(寿桂尼墓所)から愛宕神社が建つ本曲輪への参道が付けられている。城の縄張は、南半城が今川期、北半城の4つの大型堀切は清水方面からの北街道を重視したもので、1569年(永祿12)以降の武田氏か、徳川氏による改修と考えられる。

徳川家康は1585年(天正13)、五カ国の大名として、拠点を浜松城から駿府城に移した。その際、駿府城の鬼門除けとして、武将の信仰が厚い勝軍(将軍)地蔵を祀る京の愛宕神社を、本曲輪に勧請したと推定される。



愛宕山城跡(撮影:水野茂)

八幡山城 やわたやま

静岡市駿河区八幡

1476年(文明8)、今川義忠は横地・勝間田氏ら遠江在住の幕府(東幕府)奉公衆らと塩買坂で戦って討ち死した。嫡男の龍王丸(氏親)は6歳。「6歳の子では心もとない」と一族の小鹿範満を推す派が現れ、範満の母が上杉政憲の娘という関係から、政憲は狐ヶ崎、太田道灌は八幡山に陣を張った。

これに龍王丸の母・北川殿の弟・伊勢新九郎盛時(北条早雲)も加わり、「龍王丸が成人するまでの間、小鹿範満に家督を代行してもらおう」という折衷案で両派に和談が成立。盛時は八幡山を居城とし、範満の動静を監視していたが、政情が安定すると上洛。ところが、龍王丸が成人しても範満は家督を戻さないため、盛時は駿府に戻り、1487年(長享元)11月9日に駿府今川館を奇襲攻撃し、範満を自害に追いこんだ。



八幡山城跡(撮影:水野茂)

丸子城 まりこ

静岡市駿河区丸子

丸子城は、北東の泉ヶ谷に今川氏の重臣の一人・斎藤氏の屋敷があり、眼下に東海道をのぞみ、今川館(駿府城)を真正面に見通せる位置にあり、斎藤氏の詰の城としてあったものを、今川氏親の時代に、今川館守備の砦として手を入れたものと考えられる。

しかし、現在の私たちが目にする丸子城の遺構のほとんどは、そのあとに入った武田氏の手によるもので、北曲輪・二の曲輪西側下の大規模な横堀形式と、大鑪曲輪の丸馬出の縄張り、武田流極意の築城法。1568年(永祿11)12月、今川氏真を逐った武田信玄が、絶好の地にある城であることに目をつけ、大がかりな修築をしたと思われる。

1582年(天正10)、武田氏滅亡時の城兵は逃亡し、そのあと徳川軍が守備したことは不明であるが、家康の関東移封に伴い廃城となった。



丸子城跡(撮影:水野茂)

太原崇孚(雪斎) たいげん そうふ

1496(1555)



今川家の重臣・庵原左衛門尉の子として生まれ、善得寺に入り、のち京の建仁寺・靈泉院で学び、九英承菊と称した。今川氏親の懇請により方菊丸(のちの義元)の養育係として駿府に下り、義元を伴って再び建仁寺に学んだのち、妙心寺の門をたいた。氏輝の要請で義元とともに駿河に下り、善得寺の住持として臨濟宗妙心寺派の法幢を伸ばした。氏輝の没後は、義元を補佐して家督を継がせ、義元の三河進出にあたっては総大将をつとめ、武田・北条・今川の三国同盟を結ばせた。

今川義元 いまがわ よしもと

1519(1560)



今川氏親の五男。長兄・氏輝の没後、花蔵の乱に勝利して家督を継ぐ。「仮名目録追加」を制定し、東海道と太平洋水運で商品流通経済を活性化させ、商人のことは商人に任せ、「民活」と金山開発で富国強兵を図り、駿河・遠江・三河三カ国の大名となる。都下りの公家を優遇し、王朝風公家文化を花開かせた。甲斐の武田信玄、相模の北条氏康と「甲相駿三国同盟」を結び、家督を嫡男・氏真に譲ったのち、尾張に侵攻するが、織田信長の襲撃により桶狭間で討ち死した。